

日本に産する動物研究の紹介 (本誌 vol. 36, p. 543 につづく)

岸 田 久 吉

▲日本産動物の研究論著及日本産動物の研究に直接必要な論著は分類でも実験でも何でも本欄で紹介致します。故に前記の性質の論文を發表せられた方は其雑誌なり、書名なり、御知らせ下さるか、別刷を御寄贈下さるか、又は本欄の様式に依つて抄録を作つて寄せて下さる様にお願申します。但し宛名は取扱の便利上、岸田個人宛にして頂きたいと思ひます。

▲お断り 1. 日本文で出されたものは多くは論著の題目だけ位に止めます。2. 抄録原稿整理の都合で、(440-566) は大正 14 年中に活字になる筈のが、少々おくれで 15 年度分に載ります。抄録を寄せられた方と掲載を督促された方に特に此後項を寄せます。

(440) 岡 島 銀 次——大正 11 年 5 月 5 日——恐る可き甘蔗の一新害蟲に就て——農學會報 No. 236, pp. 363-371.

鹿兒島縣産種子ケ島サタウキビの害蟲で 米國産チンチバッグに似たものを次記の如く新種とし詳細に記載した上、同屬の既知種と比較を出してある。尙ほ附録としてチンチバッグの生活史及防除法をも記してある。

Blissus saccharivorus n. sp. カンショノクロナガガイタ。

此和名のカンショはカンジャの誤であらう。カンショではサツマイモになつて了ふサタウキビはカンシャであらねばならぬ。

(441) 門 前 弘 多——大正 12 年 10 月——ケヤキフシアブラムシの形態及生態に就て——盛岡高農同窓會學術彙報第一卷 2 pls. (別刷)

著者はケヤキの葉の表に春袋狀の蟲たまを生ずるアリマキをしらべ之を *Tetraneura moriokaensis* n. sp. と命名し其の諸型の個蟲を記載した上大正 6 年から 10 年初夏に至るまでかつて知り得た所の生活環の大略を報告して居られるが日本のアリマキ研究報告中最も價值あるものであらう。

(442) 岸 田 久 吉——大正 13 年 3 月 31 日——朝鮮半島産の狐——著者自刊 (東京)

朝鮮の狐をカウライキツネ *Vulpes peculiaris* n. sp. と新稱して其記載を示し、近似種との識別點をも明示したものである。

(443) 山 階 芳 麿——大正 13 年 4 月——静岡縣東部産鳥類——鳥 vol: 4, Nos. 16/17.

(444) 黒 田 長 禮——同——京大所藏鳥類標本目錄

(445) 澤 原 一 二——同——木曾の佛法僧に就て

(446) 初山徳太郎——同——八丈島鳥類目錄

(447) 久保田知俊——同——シラサギとゴキサギの雜種生ず

(448) 中 尾 春 雄——同——二三鳥類の習性

(449) 熊 谷 三 郎——同——宮城縣の鳥の渡りなど

(450) 黒 田 長 禮——大正 13 年 10 月——稀なるカンムリツクシガモの第三標本に就て——鳥 vol. 4, No. 18.

- (451) 蜂須賀正氏——同——ネズミガンは本邦に産せず
- (452) 松平頼孝——同——相模灣に於ける各種ミヅナギドリの去來及習性に就て
- (453) 黒田長禮——同——日本産ガン類に就て
- (454) 齋藤源三郎——同——千葉縣上野村の鳥
- (455) 脇山三彌——同——和漢飛禽名鑑
- (456) 松平頼孝——同——ヒレアシシギ類の習性
- (457) 初山徳太郎——雌鳥に雄羽の生じた二例
- (458) 黒田長禮——同——日本産鳥類の新和名及學名訂正
- (459) 農商務省にて鳥の渡り調査を開始す
- (460) 岸田久吉——大正13年10月3日——哺乳動物圖解——農商務省農務局發行 日本鳥學會發賣 郵税共 ¥1.72

日本産哺乳動物の通覽に便利なものとしては前に秋山蓮三氏の哺乳動物及内外普通動物誌があり後に青木文一郎氏(1913)及朝鮮博物學會の目錄(1922)があつたけれ共更に新しいもの、説明の精しいものを要求されて居たと見る事が出来る。編著者は農務局發行の本書に於て先づ其要求の或部分を充たさうと企てたのである。

掲載されたものは11目37科92屬259種類(種及亞種)で外に數個の變種があるが、今日別に數へ立てると次表の通りである。

目 名	科	屬	種 及 亞 種	變 種
食 蟲 目	2	6	26	—
齧 齒 目	7	18	77	3
翼 手 目	6	15	48	—
靈 長 目	1	1	2	—
食 肉 目	8	22	59	—
鯨 目	7	22	23	—
偶 蹄 目	3	5	22	—
奇 蹄 目	1	1	—	—
長 鼻 目	—	—	—	—
海 牛 目	1	1	1	—
常 節 目	1	1	1	—

尙ほ此書に漏れた種類は2科5屬位ある。

本書に於て新種類として記載されたものは次の通りである

- Sorex daphaenodon yezoensis*. エゾオホトガリネズミ 北海道
- Mus wagneri* var. *albula*. ナンキネズミ 東京
- Fulpes anadyrensis schrencki*. キタキツネ 樺太及北海道
- F. a. splendidissimus*. チシマキツネ 千島
- Cervus matsumotoi*. エゾアカシヤ 東北及北海道

- (461) 小山準二——大正13年12月——人の染色體研究の現況——九州帝

大農學部學藝雜誌 vol. 1. No. 1. pp. 38-42.

(462) 大島 廣——大正14年2月——海鼠類の卵の成熟及受精に就て——同前 No. 2, pp. 70-100, 1 pl.

(463) OHSHIMA, H.——Pri la Maturiĝo kaj fekundiĝo ĉe la Ovo de l'Markukumoj.——同前 pp. 101, 102.

前記報文のレズメである

(464) 肱 黒 友 三——大正14年1月17日——はらあかまひまひの調査——林業試験報告 No. 25, pp. 85-104, 2 pls.

ドクガ科のハラアカマヒマヒ *Lymantria fumida* BUTLER と云ふモミの害蟲の發育習性天敵に關する研究である

(465) 千賀崎義香——大正13年12月——蠶兒に於ける敗血症の實驗的研究——蠶業試験場報告 vol. 6, No. 9. pp. 349-409.

(466) 渡 邊 勘 次——同前——家蠶の化性に關する研究——同前 pp. 411-455.

(467) 原 田 定 次——大正14年——人尿中に現はれたるダニの一實驗例——中外醫事新報 No. 1086, 8 pp., 3 figs.

氏名を發表するを憚るべき45歳の男子の尿及陰毛部から得た *Tarsonemus latissimus* KISHIDA に近似する所の多分次の如く新稱するを要する。♀ ホコリダニの記載及診斷考按である。

Tarsonemus affinis KISHIDA et HARADA, 1925, n. sp.

(468) 石 山 善 壽——大正14年——トビイロゾウムシに關する 研究——農業世界 vol. 20, No. 5. 4 figs.

ナンキンマメ、ダイズ、アヅキ、サツマ其他蒴果類に加害するトビゾウムシ *Septicus insularis* ROELOFFS と云ふ甲蟲の千葉縣内に於ける發育習性の觀察から防除に及んだ論文である。

(469) 川 村 麟 也——大正14年1月20日——恙蟲病の研究——東京南江堂書店發行 定價 ¥5.00.

本文 308 頁 附圖 25 枚 表 7 枚 圖解 8 頁 文獻表 13 頁

本書は著者及其の指導を受けた醫學者の12年に亘る恙蟲病研究成績を網羅して一本とし、以て本病の總括的記錄としたもので、本文は第一編臨床的方面、第二編病理解剖學的方面、第三編動物に於ける恙蟲病、第四編病原的方面、第五編動物學的方面、第六編豫防法から出來て居り今日までの恙蟲病關係の成績は精疎はあるとは云へ殆ど擧げられて居る様に見える。抑も恙蟲は1810年橋本伯壽氏1819年大友玄圭氏が夫々新潟及秋田地方に於て研究したのがもとて學界に知られ、前者はツツガ、後者はケダニの名を以て其の中介動物及病氣を呼んだものであつたが1878 PALM 氏はシマムシ病と云ひ又 BAEZ 氏は洪水熱と呼んで居る、其の後田中敬助博士の有名な研究が出て洪水熱とか恙蟲病とかの名が一般に知られる様になつた。文獻の公表されたものだけでも300篇に上つて居る。本書に附けられた文獻表は殆ど完全なもので、此の編成だけでも著者の勞は多とすべきものであるが。卑近な次のものさへ脱漏して居るのは遺憾故再版の書に補つて頂きたい。

池田作次郎——明治 26 年 10 月 15 日——越後信濃川のツツガムシに就て——本誌 vol. 5, No. 60, pp. 374-377.

宮島幹之助——明治 43 年 2 月 15 日——見へる蟲と見へぬ蟲——本誌 vol. 22, No. 256, pp. 64-73, pl. 3, fig. 5.

本書の第五編は特に中介動物ケダニ(所謂アカムシ)の調査で宮島、奥村、田中、長與諸大家の研究で大體の見當のついた所を總括されて居り、今後吾人の研究に重寶な参考資料となる所である。此蟲の研究中に本邦産 Thrombidiidae 及 Erythraeiidae の種類及生活史の闡明されたのは醫學者にとつては迂餘曲折却々目ざす敵の正體が見つけれないでお氣の毒であつた次第乍ら、動物學者にとつてはもつけの仕合せとあつたと云はねばならぬ。本邦産ケダニ科に就ては他日大に論じたいと思ふから特に本書の出現を紹介し、本問題に關する最良書たることを報告して置きたい。

(470) 金子 慎 吉——大正 14 年 2 月 25 日——右心室内血壓に對する種々の操作及藥物の影響に就て——東京醫學會雜誌 vol. 35, No. 2, pp. 231-308, 2 pls.

(471) 波多野重英——同上——筋核の變化に關する知見補遺——同上 pp. 309-320, 1 pl.

(472) 柳 金太郎——同上——東京帝大生の肺活量竝に體長及體表に關する肺活量係數に就て——同上 pp. 231-329.

(473) 本 郷 玄 一——同上——*Hymenolepis diminuta* の發育圈に就きて——同上 pp. 391-410, 2 pls.

(474) 武藤喜一郎——大正 14 年 3 月——汗腺を發見し得たる動物の種類に就て——日本獸醫學會雜誌 vol. 4, No. 1, pp. 1-8, 2 pls.

著者の汗腺研究に就ては既に學界に賞讃の聲が放たれてあつた次第であるが、本篇に於ては早川氏に對して駁撃を加へた上、汗腺ある動物として人、馬、牛、羊、猫、猿、犬、山羊、白鼠、家鼠、南京鼠、鹿、野猪、豚を挙げ海狸、家兎及熊には認めなかつたと又以上 14 種の動物の汗腺は大體組織學上の見地からして(甲)多汗動物の有する所の絲球狀型と(乙)少汗動物の有する所の囊狀型との 2 型に分けられるとの 2 結論を發表されて居る。

(475) 島村虎猪 高橋雷次郎——大正 14 年 3 月——胰臟ホルモン Insulin に關する二三の實驗——同上 pp. 69-88, 1 table.

(476) 春 川 忠 吉——大正 13 年 8 月——梨の實蜂につきて——農學會報 No. 261, pp. 471-485.

(477) 春 川 忠 吉——大正 14 年 3 月 1 日——昆蟲の生態について (2)——農學研究 vol. 7, pp. 121-162.

(478) 松本彦七郎——大正 14 年 2 月 20 日——上總國梅ヶ瀬産化石トドの一

新種——地質學雜誌 vol. 32, No. 377, pp. 45-49, 1 pl.

次記一新化石トドの記載

Eumetopias watasei n. sp. 和名ワタセトド 產地前出

(479) 小林 貞一——同上——土浦の介殼化石——同上 pp. 84-88.

約 90 種同定し、存否に就て武藏野層と對比してある。

(480) 楚南 仁博——大正 13 年 11 月——茶樹害蟲に關する調査報告(1)——中央研究所農業部報告 No. 12, 132 pp. 著色圖版 4 枚

臺灣に於ける茶樹害蟲 85 種の分類一覽を擧げた上に次日記 6 種に就き、名稱、所屬、分布、發育、各期の形態、生態、自然敵、驅除法を詳記してあつて、近來同部報告として出たものの内の白眉である。

1) フタテンカギバモドキ *Andraca bipunctata* WALKER, 1865.

2) チャツノメクラガメ *Helopeltis fasciaticollis* POPPIUS, 1919.

3) キナツノメクラガメ *Helopeltis cinchonae* MANN, 1907.

4) ウスイロツノメクラガメ *Helopeltis pallidus* POPPIUS, 1919.

(481) HARUKAWA, CH.——1924, Dec.——Studies on the Bionomics of the Pear Fruit Saw-fly, *Hoplocampa minuta*——Ber. Ohare Inst. f. landw. Forsch., Bd. 2, Ht. 4, s. 505-520, 1 pl.

ナシミハバチ即ち最近 *Hoplocampa pyricola* ROHWER の名を得た所の葉蜂に就て多年著者春川農學博士の行はれた生態研究の總括と見るべきものであるが其の要領は別項同氏の和文(報文)に就て見て頂きたい。

(482) 小林晴治郎——大正 14 年 3 月 25 日——人體寄生蟲の話と寄生蟲學大意——京城近澤出版部發行

本文 59×43 pp., 15 pls. 定價 ¥1.00.

本書は表題通りの 2 部から成り、一般の俗人、殊に醫師に非ずして衛生に關係する者及教育家に必要な知識と、醫師の知るを要する寄生蟲學の大體を併せ記した名著である。圖は本文を離れてもわかる様な説明付きである。後篇は谷津博士の分類表の様に書入れ用のブランクページがある。

全體として感じの良い書物であり、價の安いのも大に讀者として有難い事である。尙ほ本書は朝鮮の讀者を相手にしたものであるけれ共、内地人及支那人に取つても有用な著述である様に思ふ。

(483) 妹尾秀實、北川政次郎、岩本正一——大正 14 年 3 月——冷凍鱈肉中裂頭絛蟲の幼蟲は生活力ありや——水産講習所試験報告 vol. 20, No. 4, pp. 123-128, 1 pl. 外に歐文レスメ 3 pp.

著者等は本邦に於て確實に擴節裂頭絛蟲の中間宿生として證明せられたマスの筋肉中に潜在する所の幼生が冷凍に依つて死滅する時間上の關係を定めるために實驗せられ、華氏零度五乃至三度の低溫に於

て凍結したマス肉の蟲は多く共満五日を経ぬ間に完全に斃死して居ることをたしかめられた。夫で葛原冷蔵會社でやつて居る冷蔵マス鱒蟲の幼生は凡て死んで居るにちがひないと云ふことになる。

(484) 村 松 茂——大正14年3月30日——害蟲飼育に關する研究竝に調査——朝鮮總督府勸業模範場研究報告 No. 13, 41 pp. 4 pls. (非賣品)

次記4種の朝鮮產害蟲の分類、分布、發育、習性、天敵、防除の大體の調査である。

1) *Militene bifidella* LEECH. ナシハマダラメイガ

2) *Rhynchites heros* ROEL. チョッキリゾウムシ

3) *Anthonomus pomorum* LINNEUS. ハナムグリゾウムシ

4) *Gryllotalpa africana* PALISOT. ケラ

(485) 森 川 勉——大正14年4月——高麗雉と北滿雉との分布に就て——鳥 vol. 4, No. 19.

(486) 松 平 頼 孝——同——相模灣に於ける海燕の採集——同上

(487) 黒 田 長 禮——同——日本の天然紀念物としての鳥類——同上

(488) 風 野 鐵 吉——同——臺灣にて初めて得られしカンムリクワクカウ——同上

(489) 石 澤 健 夫——同——本邦產鴨類の一追加 (ヒメハジロ *Bucephalus albeola*)——同上

(490) 蜂須賀正氏——同——キタアヲジは存在せず——同上

(491) 靱山徳太郎——同——八戸附近に於ける鳥類の方言——同上

(492) 齋藤源三郎——同——飼うたヒバリの産卵——同上

(493) 鷹司信輔など——同——グラント氏の訃

(494) 蜂須賀正氏——大正14年8月——ヤマドリ屬の特徴の記載——鳥 vol. 4, No. 20.

(495) 黒 田 長 禮——同——日本產ウミウに就て——同

ウミウの學名を *Phalacrocorax carbo hanedae* Kuroda, 1925, n. subsp. と新に作られた、詳細の記載などがある。

(496) 靱山徳太郎——同——ネズミガン本邦に達するの有無——同

(497) 鷹 司 信 輔——同——浦鹽產カンムリツクシガモの一標本に就て——同上

(498) 澤 原 一 二——同——木曾の佛法僧に就いて第二報——同

(499) 黒 田 長 禮——同——信濃にて獲たるシロハラトウゾクカモメ——同

(500) 岸 田 久 吉——大正14年5月1日及6月1日——動的及立體的に觀た日本產陸棲動物の分布論(上及下)——東洋學藝雜誌 vol. 41, Nos. 1 & 2, pp. 57-68, 131-144. (Nos. 505 & 506).

最新の日本哺乳動物の分類學に基づいて其の分布論を記したものである。本論は五項から出来て居り、第一項の臺灣と其の周圍に於ては臺灣にはビルマ支那亞地方及印度亞地方の分子が多く、馬來亞地方特にヒリッピン群島の分子が無いことを指摘して居る。第二項の九州と琉球島弧に於ては琉球は地質によつてよりも寧ろ水深に依つて區別を立てるべきだとし、熊毛、奄美大島、沖縄、先島の四區に分ち統計量的に産物を配置した上之を質的に論評し、熊毛區を九州に附け、以て東洋全北兩地方の境界線を七島洋に引くと結論してある。第三項壹岐對馬では對馬にツシマモクラ、ツシマヒミズ等の内地分子が在るのに對し、大陸分子のヤマネコとシベリヤイタチが居る事實を指摘し、質的に又時間的に考察して朝鮮海峡最近の開閉を論じて居る。第四項宗谷及津輕兩海峡に於ては此附近の陸上に居る哺乳類に少く共三系統ある事實を示し時間的に各系統の盛衰を説き、津輕海峡は必ずしも北の型の南限になつて居らぬし又其上に南の型即ち東洋地方的内地分子及朝鮮系内地分子の大部分に對しては先づその北限になつて居る事實を立證して、歐亞及支那兩亞地方の境界線は津輕海峡とする方が寧ろ宗谷海峡とするよりも穩當であると云つて居る。第五項千島群島では地帯が琉球と相反することを記し、カムチャツカ系と北海道系との境界は新知、得撫兩島間に存し、嘗て考へられた様に根室海峡に存せないことを明かにしてある。〔追記 著者は豆南諸島小笠原等に就ては材料の豊富になるを待つて他日此から補記を公にするであらう〕

(501) 勝木喜董——大正14年5月30日——X線の蠶に及ぼす影響——蠶業試験場報告 vol. 6, No. 11, pp. 475-486, 1 pl.

(502) 丸毛信勝——大正14年6月18日——日本産昆蟲類科の検索表——古今書院發行(定價2圓)

本文140頁 圖版17枚(276圖) 索引17頁(歐和共)

小生の知つて居る範圍では雑誌の中に出たものを除いて昆蟲の検索表は佐々木忠次郎博士著成美堂(大正元年)發行の昆蟲檢索法及今井氏著發行昆蟲檢査便覽の二色しか出版されて居らぬ様であるが何れも實用には可なり距離のあるものだつた様に記憶して居る。然るに歐米には BRNES, C. J. and MELANDER, A. L. (1915) Key to the families of North American Insects (著者自刊丸善で10圓位) 及 SCHRÖDERS Handbuch der Entomologie の中に HANDLIRSCH, A. (1913-1925) 氏が執筆して居る所の Systematische Übersicht (記載も有る) の如く頗る便利重寶且つ權威の有る公刊物が有つて、大へんに参考になつて居る。今、丸毛農學博士の著書を見ると恰かもブルース及メラランダ兩氏の合著に似たもので、圖版の如き甲蟲は却つて彼よりも精しい。トンボ蝶蛾の如きも一步進めてある。其上分類は最新式のハンドリルシュ氏に據つた所が多く、蜂などの所で聊か舊式な所があるけれ共、それも實用上には大して差支無い。

本書容むる所33目、199科。學名も和名も多くは正當且つ新しいものに依つてある。由來検索表は専門家でもうまく利用が出来るとはいかぬものであるが、それには色々の理由が有るけれ共、其の大原因は圖の不足又は不完全も一つである。本書には其の圖が多く、部分圖もあつて、餘程便利に出来て居る。且つ夫等が相當たしかな出所のあるものか著者が親しく標品から寫生されたもので

ある。又科名も假名書きにしてあつて先づ米書と同等又は少し上の方であらうと思ふ。

次に紹介にそへて讀者としての希望を記すと 1) 各目位の見本になる様な幼生及蛹の圖を入れてほしい、2) 簡単な術語解を作つて卷首又は卷末に集めて入れてほしい。之にも圖が入れられれば更に便利であらう。3) 目科一覽表をもつけてほしい。

著者の前著、實用昆蟲學要義と共に震災後に於ける邦文昆蟲學書の中の粹である。定價も亦安い。之を汎く公湖に推薦したい。

(503) 板垣四郎——大正14年7月26日——雞の腸寄生蟲 *Heterakis perspicillum* 生活史の研究——日本畜産學會 vol. 1, No. 4, pp. 165-225, 1 pl. (英文のレズメもある)。

著者は邦産雞の小腸寄生蟲として有名なニハトリクワイチウを研究するを多年、其の生活史中重要な部分を闡明せられた。即ち完成卵子は腺胃及筋胃内で孵化し、何等中間宿生を要せずして其儘小腸内に於て發育し得るばかりか、體內移行を營まぬ事及仔蟲は直腸内で生育する外、一時小腸後半部に結節を作つて或期間其所に居り適當時を窺つて腸管内に逸出し生育するの法を取る事もあると云う風な點をつきとめられて居る。

(504) 楚南仁博——大正14年8月1日——火燒島に於ける花鹿の飼養に就て——臺灣農事報 vol. 19, No. 225, pp. 666-675, 1 pl.

クワロク *Cervus (Sika) taiwanus* BLYTH, 1860の火燒島に於ける歴史飼養法を精叙し其の販路まで記されてある。

(505) 尾崎佳正——大正14年8月22日——堀澤氏ハルモストーマ吸蟲竝に其の發育史に就きて——東京醫事新誌第2434號。

マイマイ (*Euhadra*) ナメクジ (*Philomycus*) の圍心腔に寄生する幼吸蟲をニハトリに食はせて成熟せしめた者が、1914年堀澤治吉氏が日本病理學會々誌 No. 3. に報告して居られると同じ種類で、種名が無いと云ふので、次の新名を與へ成蟲及幼蟲の記載をしてある。

Harmostomum horisavai OZAKI, y., n. sp.

(506) 春川忠吉——大正14年8月25日——梨姫心喰蟲に關する研究——大原農業研究所特別報告 No. 3, (單行本)

本文 157 pp. 2 pls. 定價 二圓

本書は春川農學博士が多年調査せられたナシヒメシンクヒムシ(蛾)の綜合報告で、重要且つ便利である。

目次 1 緒言 2 分類學上の位置 3 分布 4 形態 5 近縁種及近似種 6 經過及習性 7 バンドの試験 8 傳播 9 天敵 10 防除法 11 結論と摘要 12 文献 附録研究第4報

(507) 楚南仁博——大正14年9月1日——害蟲として新に追加する四種の天牛——臺灣農事報 No. 226, pp. 42-52, 1 pl.

クハゴマダラカミキリ、クハカミキリ、イチジクカミキリ、チャゴマフカミキリ、キボシカミキリ、ワタカミキリ、トビイロヒメカミキリ、チャカミキリ、タケノトラフカミキリの臺灣産既知の有害カミキリを挙げた上、追加として次記4種を記載し寫眞が出してある。

- 1) *Monochamus tessera* WHITE, 1858. マダラカミキリ(松の害蟲)
- 2) *Stromatium longicorne* NEWMAN, 1840. イヘカミキリ(建築材)
- 3) *Cerambyx cantori* HOPE, 1845. タイワンヤマカミキリ(柑橘)
- 4) *Periotyrannus closteroides* THOMSON, 1877. ミカンノコギリカミキリ(柑橘)

(508) 栗崎 眞澄——大正14年12月——シャウジャウバへの學名並に生態——九大農學部學藝雜誌 vol. 1, (No. 5), pp. 274-284. 英文の摘要つき

かつて松村松年博士に依つて *Drosophila obscura* FALLEN と査定されて居つた猩々蠅を其實 *Drosophila melanogaster* MEIGEN とあるとし、分布、食性、出現期、一般習性、傳播、交尾、産卵、幼生、蛹、羽化、性比、壽命、趨光性を記してある。一般昆蟲學者及遺傳學者必讀の論著である。

(509) 素木 得——大正14, 15年——飛蝗に就て——臺灣農事報第19-20年號連載(?) 80 pp.

一昨年ヒリッピンに飛蝗が大發生をして問題となつたので、之に隣る所の臺灣の農業經營に就ては大に顧慮を要する理由が有る。茲に素木博士は世界に於ける飛蝗の概念を形狀、習性、防除、利用の各方面から廣く考察して、13項に分ち記述せられ、世人の參考に資せられた次第である。

(510) 小山 巖——大正15年2月——本邦産嚙齒目及翼手目齒牙の研究——日本齒科口腔科學會雜誌增刊號 pp. 1-217, 10 plates.

嚙齒目に就てはハタネズミ、ヤチネズミ、アカネズミ、クマネズミ、エジプトネズミ、ドブネズミ、アカグマネズミ、カヤネズミ、オニネズミ、オキナハネズミなどネズミ科のものを成體に就て研究した上、ドブネズミの齒の鏡査結果を記し、結論に入つて居る。結論は齒の外形に依る分類、咬頭の變化、齒に依る本邦産ネズミの分化徑路並に食性と齒形の論から出來て居る。著者は殊に最後の項に最も興味を有して居られる。

翼手目に就てはヲガサハラオホカウモリ、オキナハカウモリ、クロアカホ、ヒゲカウモリ、コユビナガカウモリ、ヤマカウモリ、アブラカウモリ、ヨウロツバアブラカウモリ、コテングカウモリ、ホリカハカウモリ、カシラダカカウモリ、キクガシラカウモリ、コキクガシラカウモリ、テラソカグラカウモリ及サシヲカウモリの成體の齒をしらべ、次にアブラカウモリに就て鏡見を記し、結論に於てはカウモリの分化、齒數に依る分類、系統的變化等を説き、圖表に依つて食性と齒形の論に氣を吐いてある。圖版10葉、すべて甚しく鮮明、又

本文中の挿圖も要領を得て、参照に便利である。

(511) ANDERSON, KNUD.—October, 1918.—Diagnoses of new Bats of the Families Rhinolophidae and Megadermatidae.—Ann. Mag. Nat. Hist., Ser. 9, Vol. 2, No. 10, pp. 374-384.

Rhinolophus, *Hipposideros* 及 *Megaderma* 三屬に就て過精確の分類と検索表を出した中に次の日本産を記してある。

- 1) *Rhinolophus perditus* n. sp. ヤヘヤマコキクガシラカウモリ (黒田博士に願して作つてもらつた和名) 其の記載は Female. B. M. No. 5, 11, 3, 15. From Ishigaki, southern Liu-Kiu. Purchased of SLAN OWSTON. Teeth markedly larger; c-m³ 6.4 mm.; c-m₃ 6.7. 唯之だけで *R. pumilus* から區別してある。 *R. pumilus* 即ちオキナハコキクカシラカウモリには Teeth not larger than usual; c-m³ 5.5-5.7 mm.; c-m₃ 5.8-6.1. (Okinawa) とあるだけである。
- 2) *R. pumilus* ANDERSEN, 1905. オキナハコキクカシラカウモリ (岸田命名) 此學名に黒田氏は嘗て (1919, 本誌 vol. 31, No. 374, p. 378) カラコキクカシラカウモリの名をつけられて居るけれ共其の者は今回 *R. blythi szechuanus* ANDERSEN n. subsp. と命名せられ、明かに分離せられた。
- 3) *R. cornutus* TEMMINCK, 1835. コキクガシラカウモリ Japan. Larger, with relatively longer tibia and larger foot. Tibia 16.5-17.5 mm. と書いてある。

カグラカウモリ屬では *H. bicolor* group, *H. diadema* group, *H. speoris* group 及 *H. calcaratus* group を取扱うてあるが、コカグラカウモリの臺灣に産するものは何とも書いてない。紹介者は唯牝一頭(產地臺灣中部地名不詳)を有するだけであるが此の外に、近來邦人で此 *H. bicolor* を見た人が無いので、或はラベルの誤付けられた標本をあてにして居るのではあるまいかと此頃少々不安を感じて居る次第であるから、臺灣在住動物學者の御注意を喚起したい。

(512) HUSTACHE, A.—1920.—Deux Curculionides nouveaux du Japon.—Bull. Soc. Entomol. France, p. 115-117.

次の2新ゾウムシの記載

1. *Phyllobius galloisi*. 高尾山
2. *Scythropus japonicus*. 東京中野 (鹿野忠雄氏東京)

(513) DRAKE, C. Y.—1923.—Some Tingitidae from Japan.—Ohio Journ. Sci., vol. 23, Nos. 1-3, pp. 102-106.

本邦産ペンバイムシ科9種を記載してある。此内一新屬3新種が含まれて居る。

1. *Monautia formosa* n. sp. カンカウ(臺灣)
2. *M. sauteri* n. sp. 同前
3. *Xenotingis horni* n. g. et n. sp. コセムボ(同)

すべて HANS SAUTER 氏の採集に係るもので、模式標品に Deutsches Entomologisches Museum (Berlin-Dahlem) に保存せられてある。(江崎悌三氏表示)

(514) FLENTIAUX, E.—1923.—Les Melasidae du Japon.—Ann. Soc. Entomol. France, p. 291. avec pl.

コメツキモドキ(甲蟲)科の論文で次の27新種が記載してある。

1. *Poecilochrus japonicus*. 東京

- | | |
|---|--|
| 2. <i>Galloisius amplicollis</i> . 東京 ガロアムシ | 3. <i>Fornax victor</i> . 東京 |
| 4. <i>F. nipponensis</i> . 札幌、ジュンサイ沼、神戸 | 5. <i>F. lewisi</i> . 神戸 |
| 6. <i>Dromaeolus japonensis</i> . | 7. <i>D. brevipes</i> . 札幌、奈良 |
| 8. <i>D. cariniceps</i> . 肥後 | 9. <i>D. nipponensis</i> . 東京、福島 |
| 10. <i>D. lewisi</i> . 東京、笹子峠、奈良、福島 | 11. <i>D. rufulus</i> . 東京、札幌 |
| 12. <i>Proxylabius galloisi</i> . 東京 | 13. <i>Farsus ainu</i> . 東京、笹子峠、札幌 |
| 14. <i>Arhagus carinicornis</i> . 肥後 | 15. <i>Dirhagus boveolatus</i> . 東京、九州、日光、宮ノ下等 |
| 16. <i>D. mystagogus</i> . 京都、笹子峠、東京、日光等 | 17. <i>D. modestus</i> . 日光、東京、九州等 |
| 18. <i>D. marginatus</i> . ジュンサン沼 | 19. <i>Balistica elongata</i> . 日光 |
| 20. <i>Sarpedon atratus</i> . 福島、中禪寺 | 21. <i>Otho nipponensis</i> . 札幌 |
| 22. <i>Bioxylyx galloisi</i> . 日光 | 23. <i>Xylabius rufomarginatus</i> . 日光、東京、奈良 |
| 24. <i>X. ainu</i> . ジュンサイ沼 | 25. <i>Enryptichus uicinus</i> . 北海道、奈良 |
| 26. <i>E. lewisi</i> . 須走 | 27. <i>Hypocoelus Harmandi</i> . 東京 (鹿野忠雄氏表示) |

(515) FUKUI, KEN'ICHI.—Aug. 1923.—Note on Experiments on the color change of the File-fish, *Monacanthus cirrhifer*.—Fol. Anat. Jap., Bd. 1, Heft. 6, s. 345-348.

(516) MORITA, JUN'ICHI.—August 1923.—A cytological study on the Sperm-nutritive cells of *Rana nigromaculata* HALL.—Folia anatomica Japonica, Tokyo, Bd. 1, Heft. 6, s. 283-312, 2 pl.

森田學士トノサマガヘルの精子營養細胞の細胞學的研究で、和文は本誌 vol. 34, pp. 374-391 に掲載して居られる。

(517) NISHI, SEIHO.—Aug. 1923.—Phylogenetische Differenzierung der Stammuskulatur bei Fischen.—Fol. Anat. Jap., Bd. 1, Heft. 6, s. 313-344, 12 Textfig.

(518) ANDREWES, H. E.—August 10, 1923.—On the types of Carabidae described by Schmidt-Goebel in his Faunula Coleopterorum Birmaniae.—Transact. Entomol. Soc. London, pts. 1, 2, pp. 1-63.

日本産で關係あるのは次の8種類ゴミムシである。

Dendrocellus geniculatus.

C. chloroptera.

Lebia calycophora.

Coptodera interrupta.

Calleida splendidula.

Metabletus quadripunctatus.

Pentagonica rubicollis.

Eustra plagiata.

抄 録

ノミの起原論

EWING, H. E.—July, 1924.—Notes on the taxonomy, and natural relationships of fleas, with descriptions of four new species.—Parasitology, vol. 16, (No. 3), pp. 341-354, 1 pl. & 1 textfig.

次の抄録はユーイング氏の前記論文の第三編、Recent and old hypotheses as to the origin of fleas から摘要したものであります。

ノミ類の由來に就ては色々の説がありますが、近頃ハネカクシ(甲蟲)類から起つたと云ふ説までも提唱される有様であります。先づ此を次に列挙します。